

出もあって、久原のビジネスは久原の義兄鮎川義介への譲渡を含めて大幅に縮小します。それに伴って、説太郎も久原と疎遠になっていきます。昭和になって毛皮事業のみに専念している様子が、先の興信録から読み取れます。

●戦後には、西之浦の自邸(=旧中山家住宅)で、悠々自適の生活を送ったようです。パン工房をつくったり、日本酒の醸造も楽しんでいたことが伝わっています。近隣の方々に宝塚歌劇団の観劇バスツアーを世話したとの情報もありました。説太郎の生涯を簡単にまとめると、右の年譜のようになります。

説太郎の年譜

1873(明治 6)	0	才一郎の長男として誕生
1888(明治 21)	16	小学校卒業、一時教鞭をとる
1889(明治 22)	17	上阪し、学校選択を図る
1891(明治 24)	18	大阪商業学校入学
1895(明治 28)	22	卒業後、上野商店入社
1906(明治 39)	33	島徳商店入社
1910(明治 43)	37	久原鉱業入社
1914(大正 3)	41	日魯漁業専務取締役
1915(大正 4)	42	久原鉱業専務取締役、日本汽船の創業
1918(大正 7)	45	大阪鉄工所(日立造船)専務取締役
1919(大正 8)	46	日本汽船の創業、専務取締役
1920(大正 9)	47	氷室組の創業、社長
1945(昭和 20)	72	連島西之浦に帰郷
1961(昭和 36)	88	病没

■中山家三代について

幕末から明治、家禄を失い先行き不安に翻弄されたであろう武士=才一郎、明治から大正にかけて日本資本主義の揺籃期にその才智を駆使して駆け抜け、一方で2つの世界大戦では手痛い傷を受けた実業家=説太郎、さらに、世界大戦の合間に父説太郎よろしく一山を当てようとラン育種栽培ビジネスにトライしたものの、やむなく中断し、育種・栽培技術の普及啓蒙で大いに日本ラン界をリードした林之助、あらためて、この中山家三代の生涯を概観してみます。

○才一郎

●説太郎の成功譚は、幕末の動乱と明治新政府の混乱の中で、下級武士一家がどのようにして生き延びたか、それを語ってくれます。実は、本ページの冒頭の記述は正確さを欠いています。中山家の



仕えていた山崎家は、明治元年になって藩になります。それまでは交代寄合山崎家の所領地で、藩としては認められていません。説太郎の生まれた明治6年には、廃藩置県により、成羽県、深津県を経て、すでに小田県になっています(その後、さらに岡山県に併合)。

●才一郎が生まれた4年後、嘉永6(1853)年の黒船来航をはじめとして諸外国からの開国要求への対応をめぐる、大老井伊直弼による安政の大獄があり、桜田門外の変で井伊は暗殺されます。

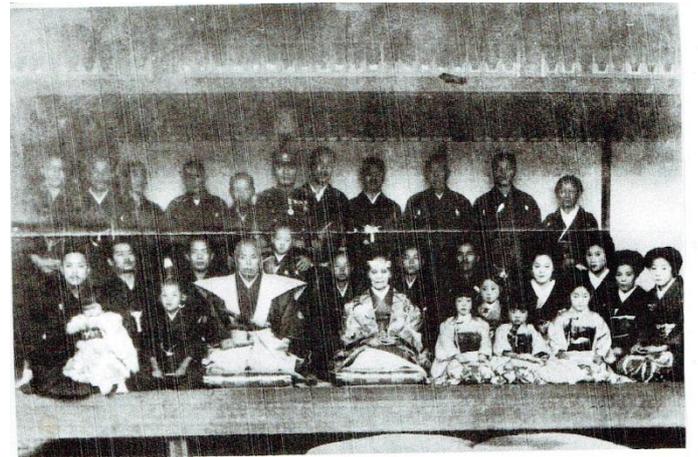
●慶応3年、大政奉還のあった年、才一郎は18才です。陣屋勤めはしていたでしょうが、家督の継承

治の青雲」所収、娘の思い出記より)という建設動機を語りますが、饒への返礼だったのかもしれない。

●上野商店では、倒産した毛織物会社の再生とその売却で得た利益、島徳商店では、経営を任された鉱山を久原鉱業に高値売却で得た利益の一部を資金提供者より提供され「小成金になった」と自分を評しています。直後に、久原房之助に請われて久原鉱業に入社します。神戸住吉の久原本邸(明治 37 年建設)で説得されたはずで、甲子園球場の 2.5 倍もの膨大な敷地の中に、和風庭園付き屋敷、ロシア風洋館などを見て、小成金が住宅建設を思い立ったことは容易に想像できます。邸宅は、富豪のステータスです、そして、急いで富豪になっていきます。「貧乏士族が両親の希望で殿様形式の邸宅を親孝行のため建てた」(「明治の青雲」林之助序より)との説明が、後付けに聞こえます。



●大正 8 年、住宅の落成式がありました、丸 2 日間ドンチャン騒ぎだった様子が伝えられています。それに兼ねて、説太郎の父母、オ一郎(69 才)・鹿野(67 才)夫妻の金婚式が催されています。最前列左端が説太郎(46 才)です、前年に生まれたばかりの五女米子を抱えています。金婚式を祝う風習は、もともと日本社会にはなかったのですが、明治中期にイギリスからもたされたものが急速に広まったようです、中山家は進んで取り入れたのでしょう。オ一郎は、袴に脇差、武士の正装です、時代は移っても、心根はまだ武士であったのでしょうか？



●中国の辛亥革命を主導した孫文を資金的に支援した久原房之助の名代として、説太郎は革命グループへの借款の実務を担っています、その額 240 万円。

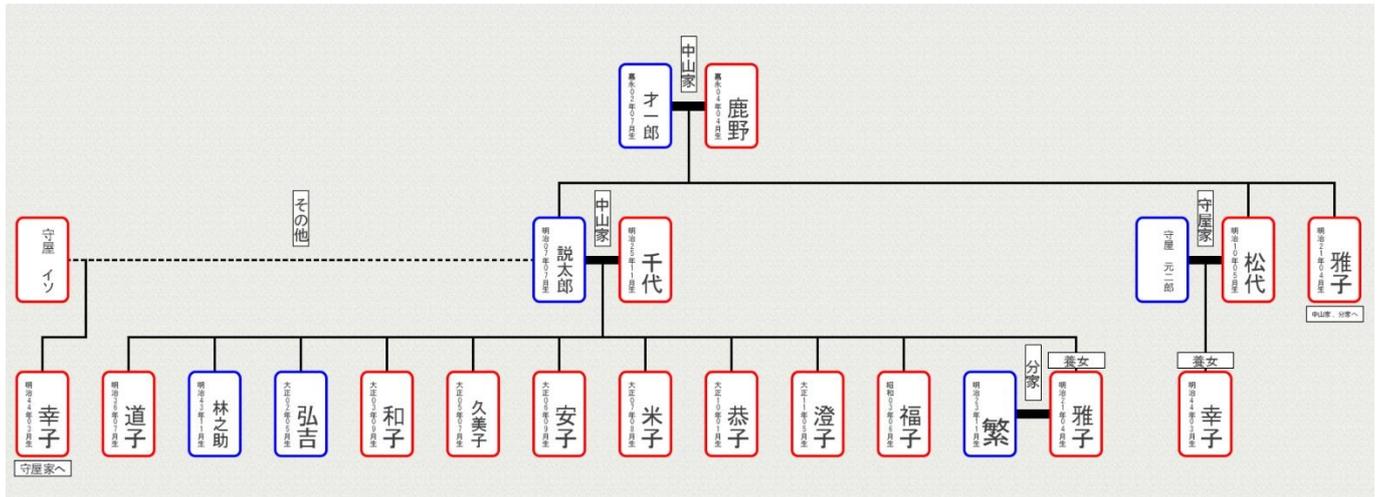
●説太郎は、戦後帰郷してこの住居に住みますが、それまで殆ど住んでいません。年に 1,2 回の帰郷は「殿様のお国入り」のようで、留守居は、準備方大変だったようです。昭和 14 年まで、留守居は、分家した義兄の中山繁でした。

●説太郎の住まいの全体は知られていません。明治 43～大正 5 年まで函館に、大正 5 年から大阪堂島に、いつのころから神戸垂水(?)に、居を構えていたようです。

●昭和 30 年代に、「水島地帯に工場誘致の推進に尽力、それと同じ時に五十年來の旧知の松永安佐衛門、小林一三両氏が、相ついで来宅され、それを機に、中央の大企業進出を依頼協力をお願いしました、後に関係会社、日本鉱業・川崎製鉄の両社が、工場を建設することに決り、その創業を楽しみ待ち望んでいました」と林之助が語っています(「明治の青雲」林之助序より)。この独白を支える史料はありませんが、工場誘致に尽力したことは確かなようです。

●1961(昭和 36)年、88 歳で死去。

●説太郎を中心にした中山家の家系図です(人事興信録[大正 7～昭和 18 年]の記述から作成したもの、この資料では説太郎の生年が明治 7 年になっている、他の資料では明治 6 年)。



○林之助



●林之助は、明治 43 年、父説太郎 37 才、母千代 18 才のとき、中山家の長男として誕生します。幼年期は、この住居で過ごしていたことは明らかですが、十代半ばには、神戸垂水(?)に転居しているようです。

●林之助は、園芸学校に学びます。在学中にランの無菌培養技術に触れ、卒業後、ランの聖地「大山崎の加賀邸(大山崎山荘)」に通ううちに、ランの栽培ビジネスを志します。昭和 10 年、26 才のとき、栽培適地を求めて台湾に渡り、栽培技術を磨いていきます(説太郎も、23 才(明治 29 年)の頃、上野商店の新規ビジネス開拓のため、1 年間台湾に滞在していますが、得るところなしとの判断で帰阪しています)。5 年目には、一定の目途を達成しますが、義兄繁の死と戦況の悪化と物資不足から、昭和 15 年、帰日し帰郷します。邸宅の留守居は、林之助になります。

●地元の連島郵便局長を務めながら、ランの育種と栽培技術の普及に精力的に活躍します。

日本洋蘭農業協同組合の初期(昭和 20~30 年)の組合報に多くの記事を寄稿/日本・蘭協会会長(1981~1990)/「沖縄国際洋ラン博覧会(1987~)」に参画/1987 年世界ラン会議・ラン展組織委員会副会長/日本・蘭協会名誉会長(1991~2010)/蘭おかやま(1991~2006)の実行委員長/2005 年、NHK ハイビジョンふるさと発「失われた蘭の楽園」に出演、などです。

●2009 年、白寿の祝い、かつて台湾で指導し、

後に胡蝶蘭の栽培で大成功した李金盛も参加しています。2010(平成 22)年、100 歳で死去。



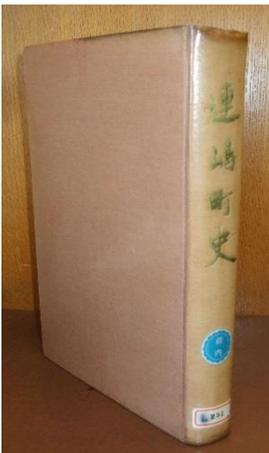


■説太郎の紹介記事

ところが、これほど活躍していたにもかかわらず、説太郎の紹介記事は多くありません。以下には、入手できた3つの記事を載せていますが、久原房之助の黒子に徹していたことにその一因がありそうです。

●連嶋町史(昭和31年刊) 連島の人物誌より P338-9

中山説太郎(1873～)



氏は才一郎の長男として本町西之浦に生まれた。中山氏は元岡田藩に仕えたが後に成羽藩に仕え西之浦陣屋に勤務せし故明治維新後士族となられた。説太郎氏は小学校卒業後、十六才にして一時連嶋校に教鞭をとりしも志を立て上阪し、間もなく東京へも行ったが再び大阪に帰り二十四年に大阪商業学校に(今の大阪経済大学の前身)に入学し二十八年に卒業した。卒業後上野商店に入り、石炭、鉄、羊毛等の商業に従事し台湾や樺太等をも視察し水産会社を興した。三十二年島徳商店に入り徳島の持部鉱山、東山鉱山の経営を担当すること五ヶ年なりしも、此等の鉱山が久原鉱業株式会社に買収せられることになり久原鉱業に入社した。日魯漁業を設立(資本金三百万円)し商用を以て露都に赴き、製銅を露国政府に売渡して大に利益をあげたので帰朝後大正六年には久原鉱業の専務取締役となった。

後久原商事株式会社が創立されたので又専務取締役を兼ね株式会社大阪鉄工所の取締役をも兼務された。第一次欧州戦頃に日魯漁業を解体し之を基として日本汽船会社を創立し又其専務役を兼ねた。当時諸会社の専務として個人的にも大成功を遂げられたので巨万の財を得て郷里に大邸宅を建築された。西浦小学校講堂其他の資をも寄附せられた。

大正九年に第一次欧州大戦が止んだので経済界は恐慌を来し、久原商事会社が先ず整理を発表し続いて関係各会社共整理状態となり、久原氏は政界入りをする事になったので、氏は関係各会社より退隠することになり、その後は冷凍船を建設して冷凍事業を経営したり、或は朝鮮で鉱山事業を計画したりなどされたが、日米終戦後は、老年の為に帰郷家居せられて今日に至って居られる。

●大阪財界人物史(大正14年刊) P259-260

久原鉱業株式会社 専務取締役 中山説太郎氏

其貌は則ち粹然一才人、無髯の好大夫、炬生する巨瞳と引締つだ口元、全体に意気、才情の横溢し、千発せるが如き、少くとも当代華城実業界の異彩たる中山説太郎氏は実に、本列伝中逸すべからざる一人とす。

氏は岡山県士族中山才一郎氏の長男、小壮志を立てて大阪に出て、久原氏の認識するところと為り、一躍久原家の中堅と為り、往年戦後好況に際し、奇策縦横、為すこと皆策中す、大胆なる久原の商策の陰に、雄図を健蔵する中山氏あり、智略、識才、併び有し、かつ資本階級としては、極めて円満にして人望ある久原房之助氏を擁し、氏が尖鋭衝(あた)るべからず、八方閃躍する謀計を活描する久原一段の映画は、実に、当時何人も其の矢面に立つ能はざらしめき。

久原家は、当時、一方、才気煥発(かんぱつ)、縦横の奇才たる氏を右翼に、深沈果決(かけつ)、着実穩健なる山岡千太郎を左翼とし、而してこの左右両将は予(か)ねて竹馬たり、又莫逆(ばくぎやく)たり、水魚相縁(よ)りて以て内外響應し、鉱業会社の企図一たび天下に公表せらるゝや、競進してその株を獲んとするもの、忽(たちま)ちにして満株を越ゆ、時勢を見るは中山氏の尤も明とする処、戦国的英雄の面目は蓋し氏の尤も理想とする処ならん。

氏は久しく久原家、北辺の業を大宰して、露領沿海の漁業権を掌握して、北海の鎖ヤク、海風万里、波濤相搏(そうばく)の処に、澆刺たる鮮鱗を網尽して、大に東洋男児の雄風を誇称したる、氏ならずんば能はざる処。而かもこれ氏にとりては、其才貌の一斑のみ、氏今や凍漁船の新事業に隠れ、久原鉱業の一角に埋るといへども、雄才漸く政界に其覇を称とする寸光勺影を投じ来る、想ふに、氏の過去はかくの如く華耀あり。氏の前途は更らに一層の光明あるべし。

要するに、氏は華城財界の奇傑にして、これを戦国武士に例を求むれば、それ直江山城守直続(兼続?)乎。



●大本百松伝(昭和 37 年刊) P28-30

中山説太郎(1873-1961)も連島、西の浦の生まれだ。中山と言っても、今は知っている人も、少なくなつたろうが、第一次世界戦争(1914-20)の、いわゆる「成金」時代には、一代の惑星として、日本の実業界を起伏せしめた、快男子である。

大阪商業学校(今の大阪大学)を卒業後、島徳蔵商店に入り、同商店所有の諸鉱山の開発に成功し、ついに、山と一緒に久原鉱業株式会社に併合され、「久原」の専務にすえられたのが、世間に知られる発端である。その八面六臂も活躍振りは、つねに話の種を蒔いて、華やかな舞台を展開させたものだ。

その一例をあげると、プレミアム——。株券に対する「権利割増金」、の競買を、取引所でやらしたのは、日本では、中山が最初の人である。「久原」の代表者として、その戦争中、銅の払底に悲鳴をあげる露西亞帝国の首都ペテルブルグ(レニングラード)に乗込み、中山は、その売込みに凄腕を揮って、大成功をおさめた。それは、図にあたった。一株につき、50 円の高値を噴くに至った。その時の、彼の暗中飛躍は、じつに目覚しいものだった——、と、北浜雀の囀る「島徳物語」の中で、よく聞かされる一節なんだ。

ことに面白いのはそのロシアへ行つたとき、向こうの要路者に捻じこんで、北海漁業の権利を獲得し、帰朝するとすぐ、「日露漁業」を創立したことだ。いかにも、海に縁のある、連島人らしいではないか。日本中を煙にまいて、せせら笑ってる“面魂”の太さ、中山説太郎は、どこまでも、「海賊大將軍」の地を

ひく、連島男であった。

晩年は、連島西ノ浦の自邸に、悠々自適しておった。風雲に乗じる者は、風雲が起ころねば、いかなる偉材も、活動の舞台がない。彼のような、資本主義自由時代に大きくなった人間は、こんどの大戦争にも、働く余地はなかった。昭和 36 年 10 月、自邸に病没、享年 88